



かどや通信

第55号

発行日：令和5年3月吉日

発行行：かどや保存会

発行責任者：寺田 直喜／編集：廣野 克子

展示好評で新講座スタート 水引むすび塾と己書道場

かどやでは毎月、様々な分野の趣味の講座を開催している。今年も年初から作品展示で人気を得たものが新たに教室としてスタートした。一月には、立野麻貴さんが講師を務める水引アートの「水引むすび塾」が、二月には伊勢谷ひとみさんの「そらあれひとみ己書（おのれしよ道場）」が開講した。《最新機器導入の指導が好評》

立野さんの「水引アート作品展」は昨年十一月に展示され、同月十二日に体験講座を開催。基本のあわじ結びと梅結びを習得した。両方とも縁起の良い結び方で、お年玉のポチ袋に最適。参加者は自宅で復習を兼ねてポチ袋を量産したそつだ。

一人ひとりに丁寧な指導を添った指導を行っている。

また、説明時には手元が見やすいように、ハンディーカメラを大型のテレビ画面に接続するなど、最新機器（？）も導入。資料も分かりやすく図解されており、自宅でもしつかり復習できる優れものだ。内容もバラエティに富んで



おり、一月は体験講座と同じ基礎の結び方を学び、二月はお雛様、三月はアクセサリーを作った。今後も季節にあつた作品作りに挑戦する。

「水引」は、贈答品を送る時に包む奉書紙を結びとめるための「こより」のようなものだ。近年「結ぶ、編む、巻き上げる」という水引細工の伝統的な技法を基に、現代感覚にマッチした誰でも楽しめるクラフトワークにアレンジした「水引アート」が密かなブームになっている。



今回、各自の特長がでていて、「皆違つていて、」皆違つていますが、それが己書の魅力です」と伊勢谷さん。「家で復習してきます」という人もおり、道場は楽しいスタートを切った。

《自由に！楽しく！己書道場》

今年一月の展示は「多田美幸・己書（おのれしよ道場作品展）」で、一月九日には体験教室が行われた。そこで、多田さん（日本己書道場・上席師範、伊賀市在住）と共に指導に当たった伊勢谷さん（同道場師範、明和町在住）が、三月から「そらあれひとみ己書道場」を開講し、五名が参加した。

初回は、基本中の基本として、まず薄墨で円を書き、その中心に「ありがとう」の文字を書くことから始まった。己書は筆、ペンを扱うが、筆の使い方も独特で戸惑う人もいたが、書き順を気にすることなく自分のペースで進めることができ「楽しかった」と、参加者の反応は上々だ。

スタッフ大奮闘！ ひな飾りはハラハラドキドキ

二月は毎年恒例、江戸期と明治期に作られた雛飾りが展示された。江戸期の



土路屋の雛飾り

ものは、鳥羽三丁目の明慶川沿いの土路屋河岸で当時八百屋を営んでいた土路屋所有のひな飾りが二組。

かどやの御殿雛



明治期のお雛様は、かどや(廣野家)特製で、京都御所を模した御殿飾りだ。いずれも、現代の段飾りとは異なり、京都の公卿文化が偲ばれる貴重な物ばかり。見学に訪れたお客

様は「こんなお雛様を見たのは初めて。表情が豊かで、しぐさもユニーク。いいものを見せていただきました」と話してくれた。



飾りつけは、休館日の一月三十一日にスタッフ五人で半日がかりで行った。人形も御殿等の部品も百五十年以上は経つて

いて傷みが激しく、触るのもドキドキで、慎重さが要求される。人形の配置も一年ぶりのため「去年どういつ風に並べたっけ」「一年前のことやから、思い出せへん」と戸惑いの連続。もちろん、過去の写真は参考にするのだが、「この並べ方はちよつと変やなあ」等々、以前の並べ方にも疑問が浮かび、確信が持てない。最終的には「令和五年バージョンということにしましよ」で落ち着いた。

そんなふうについに苦労して飾ったお雛様だが、二月四日には撤去作業が行われた。片付けにも半日は要すると思われたが、こちらは数年来の経験が生き、手際よくスイスイと収納され、なんと四人で約一時間半で作業は完了した。

スタッフは来年もきちんと飾れますようにとの願いを込め、人形たちは一年間の眠りについた。

ひな飾りにもぴったり！ 柔らかなつまみ細工にうっとり！

お雛様の展示と同時期に、隣の部屋では玉城町在住の宮崎朱美さんの「つまみ細工作品展」が開催された。

つまみ細工は、正方形の小さな布(羽二重やちりめん等)を折りたたんだりつまんだりして花や蝶、動物等を形作る江戸時代からの伝統工芸だ。

宮崎さんは七年前に娘の髪飾りを作ったのがきっかけで、独学で始め、翌年には講師資格も取得し、今では市民講座等で講師を務めている。



かどやでは、ピンクや白など柔らかな色合いのかんざしや和菓子連想させるような細やかな菊をはじめ、雛飾りにもぴったりの優しい色合いの作品二十点が展示された。どの作品も色の組み合わせが絶妙で、宮崎さんのセンスが際立つ作品が見学者を喜ばせた。

布でつながる仲良し三人展

三人展は今回で四回目だ。三人とも布を使っているが、作品分野はそれぞれ異なっており、見学者の目を楽しませている。

小林宜子さんの作品は、草木染シルク手織り。今回は前回(令和三年十一月)にも増して草木染の種類も増し、ポンチョや麻のブラウスとズボンのアンサンブル等魅力的な作品が並んだ。

福田雍子さんは、古布の創作服が得意。木綿の藍染めを使ったパッチワーク風のベストやジャケットには刺し子の糸にカラフルな色を使ってモダンな雰囲気を出せる等、センスが光る。

小野洋子さんは、コロナ前まではジュエリー・デザイナーとして全国を飛び回っていたが、コロナ禍で活動が制限された時間に和服の古布を使う



た洋服作りにも挑戦。会場にはネットレスや指輪と共に、個性あふれる和洋服を展示した。

カラフルな草木染の作品

マイ味噌作り、本格復活！

第九十一回かどや塾「マイ味噌を作ろう」が二月二十二日に開催された。毎回申込多数のため、午前九時から十時半からの二回に分けて実施しており、合計十九名が参加した。

味噌作りは平成二十年に始まり、今回で六回目。講師の河村幸信さんは、紀北町の老舗味噌屋「河村（こうじ）屋」三代目で、昔ながらの製法で手作りした糀から味噌を作っている。

「コナ禍での味噌作りは、中止も検討されたが、毎回大人気で、開催を望む声が多かった。そこで、本来なら、（こうじ）屋さんが蒸してくれた大豆をつぶすところから



ら始めるのだが、（こうじ）屋さんですり潰してくれたいものを使用して時間短縮を図ってきた。しかし、今回は「コナ」の感

染者数が減少傾向になってきたため、三年ぶりに大豆つぶしからスタートした。参加者のほとんどがリピーターのため、作業は案外スムーズに進み、時間内に二個分作る人もいた。

味噌作り教室には、当日の早朝に河村さんが蒸してくれた大豆の優しい香りで満ちていた。その大豆を参加者各自が加工したことで、それぞれのマイ味噌が八月には完成する。参加者たちは「熟成した大豆の香りが満ちているこの樽を開ける日が待ち遠しい」と、話しながら、作り立ての味噌樽を抱えて帰っていった。

《つまみ細工って楽しい！》

「つまみ細工ワークショップ」が二月十七日と十九日に開催され、六名が参加した。

つまみ細工がどんなものか知ってもらうための体験講座で、宮崎朱美さんの指導のもと、ピンクの梅の花作りにチャレンジした。



数センチ四方の柔らかい絹をピンセットで折り曲げ



たりつまんだりして形を作っていくのだが、集中力を要する細かい作業のため、会場には緊張がみなぎりシーンと静まりかえっていた。

一つの花びらができると「ふう」とため息がもれた。一息ついたところで「すごい緊張感ですね」と訊ねると、「この教室でも、こんな感じ。緊張感が張りつめています」と宮崎さん。生徒さんに「疲れませんか」と聞くと「緊張しますが、出来た時の達成感がたまりません。楽しいですよ。機会があつたらまた参加します」と答えてくれた。

《奇跡が繋ぐ絵本文化！》

かどやでは昨年の六月から毎月一回「絵本の時間」と称して、絵本の読み聞かせを行っている。

感性を豊かにし、想像力を養い、集中力も増すといわれている

絵本文化を、かどやでも是非根付かせたいの思いからだ。

読み手は、元保育士と元学校教諭という最強の三人がいるのだが、参加者はほぼ毎回一組だけ。しかし、奇跡的にゼロにはならなかった。ところが、今年一月、ついに一筋の希望の光だった一組が現れない。そこで、「こんな時は、読み方の練習をしましょう」と、落ち込むことなく無観客で練習を続けていると、終了五分前に、なんと鳥羽小学校の六年生がどやどやとやって来た。なかまの勉強の一環としてかどやを訪れたのだが、これこそ奇跡！「まずは、絵本の読み聞かせを楽しんでねー」と、小学生を前に読み聞かせを行った。



彼女らは、熱心に聞いてくれたが、かどやの調査はできたのだろうか？

「いつするっかどやー」 「ダイヤモンドプリンス」号奮戦記

豪華客船ダイヤモンドプリンス（DPP）号が三月九日、三年ぶりに鳥羽港に入港した。同船は平成三十年から令和二年のコロナ発生前までに約十回鳥羽に寄港し、市の公共団体が中心となり歓迎プログラムを実施した。かどやもボランティアスタッフを総動員し、茶道教室の皆さんの協力も得て、茶道体験をはじめ日本文化に触れる活動を積極的に行った。

しかし、三年ぶりの今回は、詳細情報直前まで分からず、かつ下火になったとはいえ「コロナ感染の不安もあり」「かどやはどうする？」と頭を悩ませた。結局、以前のような特別な歓迎プログラムは行わず、普段通りの対応をする事になった。

しかし、乗客と乗務員で約二千五百人と聞き、「スタッフを増やさないと混乱するかも」と、入港前夜に急遽ボランティアスタッフさんに「都合のつく方は、かどやに来てー」とラインで窮状を訴えた。すると、「なんとかするわー」「午後からなら大丈夫よ」等、頼もしい返事が届き、当日は六人が駆けつけてくれた。

ところが、午前中はかどや周辺に

外国人の姿は皆無。ヒヤリとしたが、昼過ぎにかどや前で写真を撮っている四人組を発見。早速「二百年前の日本建築を見ませんか」と誘い館内を案内したところ「とても楽しかった」と大感激していただけた。その後、外国人が続々（？）とやってきたので、和服姿のマユミさんには玄関にスタンバイしてもらい、記念撮影にも応じるなど、入館者の満足度は向上したはず。他のスタッフも三年前にスマホに導入した翻訳アプリと格闘しながら、交流を図り、「鳥羽が一番楽しかった」とうれしい言葉をいただいた。二階には藍染めや草木染、和服をリメイクしたものなど日本らしい作品が展示販売されており、面白い物を楽しむご夫婦もいた。

彼らが帰ると、ス々の体験に全員ぐったりだったが、楽しんでもらった充実感に満ちていた。「大変やったけど、楽しかったね。次回は以前のように水族館近くまで迎えに行つて、日本と鳥羽の良さを体験してもらおう！」と話し合った。

かどやはこんな仲間たちを支えられている！



時間区分 部屋	午前 10時～12時	午後 13時～16時	全日 10時～16時	冷暖房設備 利用料
座敷南(10畳)	500円	600円	1,100円	500円
座敷北(8畳)	400円	500円	900円	——
仏間(6畳)	300円	400円	700円	——

- ・営利目的の場合は、料金表の10割増しとなります。
- ・鳥羽市民または市内勤務者以外の利用は、料金表の5割増しとなります。
- ・許可された利用時間を超過する場合は、割増料金が発生します。
- ・冷暖房費は、全日使用の場合は2倍になります。

◆◆◆ 貸部屋の案内 ◆◆◆
かどやを有効に活用していただくため、一部の部屋を貸部屋として貸し出しています。茶話会や勉強会、展示会などに活用ください。
詳細は、かどやへ。
電話〇五九九二五八六八六

かどや保存会 令和5年度会員募集中！

かどや保存会は、歴史的文化財である「鳥羽大庄屋かどや」の保存ならびに効果的な活用・運営をめざして活動を行っており、当会を支援して下さる会員を募集しています。

平成30年度の会員数351名がピークで、それ以降残念ながら年々減少しています。しかし、コロナ禍にも関わらず、令和4年度は令和5年3月15日現在で260名の方から新規や継続のお申込みをいただきました。皆様からのご支援を心より感謝いたします。コロナの収束にはまだ時間がかかるものと思われそうですが、感染防止対策を強化しつつ、皆様の憩いの場所となるよう、スタッフ一同これからも日々努力を重ねてまいりますので、令和5年度もご支援よろしくお願い申し上げます。

令和5年度(令和4年4月1日～令和6年3月31日)の年会費(1口2,000円)は、継続・新規を問わず、以下の方法で納入してください。

(1)手渡し：かどやにお越しいただき、直接事務局にお支払いいただく。

(2)銀行振込：郵便局 当座 かどや保存会 〇〇850-4-151751